【静岡県立静岡高等学校】

令和３年度 第１回 学校運営協議会（報告）

日時：令和３年６月 26 日(土)
午前９時 30 分～12 時
会場：静岡高等学校 会議室

１ 開　　会

・校長挨拶

２ 授業参観

３ 協 議 等

（１）学校運営協議会制度の説明（校長）

- 設置経緯、制度概要、委員の任務等について説明
- 静岡県における学校運営協議会イメージ、協議イメージ説明
- 静岡県立学校における学校運営協議会設置規則及び要綱説明

（２）自己紹介、会長・副会長の選出

- 会長及び副会長について、それぞれ推薦があり承認。

（３）令和３年度学校経営計画の説明及び承認（校長）

- 令和３年度学校経営計画（全日制及び定時制）説明
  本年度は、昨年の学校評価等を踏まえ計画を４月に策定。令和４年度については、本協議会の意見を踏まえ策定予定。
- スクールポリシーの策定について
  令和３年３月の学校教育法施行規則等一部改正により、６年度末までを期限とし、学校におけるスクールポリシーの策定及び公表が義務化。本校においては、本年度策定予定。

＜意見・質疑応答＞

Ａ委員　：　自分もテーマとしているが、説明の中に「地域との関わり」とあった。この計画では、どの部分が「地域との関わり」となるのか。

校　長　：　リーダー育成の部分となる。静岡高校生は、県内でも広範囲の地域から入学しているが、地域の実情を知ることも大切である。地域と関わり、社会において、様々な知識、技術を身に付ける。進学し、社会に出て、地域に戻ることもあり、地域の中でもリーダーシップを発揮するような人材になる。

Ａ委員　：　高きを仰ぐ「卬高」は昔からよく聞くが、実践目標「われわれは勉強を本分とする。人に迷惑をかけない。自主的に行動する。」も昔からあったのか。

副校長　：　20～30 年前に自治会(生徒会)の生徒がつくったと聞いている。

Ａ委員　：　個人的な意見だが実践目標からは内向きなイメージを感じた。「地域・社会とともに」とは違う、内側に向かった印象を受けた。

会　長　：　本質をついた良い意見だと思う。

Ｂ委員　：　「低学年から高い志の育成に努め進路実現を図る」とあるが、むしろ、大学に入り進路実現した後に、社会に出てどういう風に活躍していくのか、どういう志を持って生きていくのかによって大きく変わる。高い志の育成をどのように考えているのか、もう少し具体的に知りたい。

校　長　：　静岡高校には大変高い志を持った生徒が多い。夢を実現できるのか、適性はあるのか、様々な進路があるため、多くの機会に触れるようにしている。オ

ンリーワン・ハイスクール事業でも様々な進路を踏まえ「知る」「体験する」といった機会を低学年から用意している。

Ｂ委員　：　静岡に戻り 15 年ほど市の観光ボランティアガイドをやり、静岡学問所も随分勉強した。学問所の外山正一教授が東大から静岡に戻り講演した時に、「江戸時代には日本でも最高級の教育をしていた駿府だが、静岡県の大学進学率は平均ちょっとで高くない。大学の学会や各界で活躍する人間を調べてもあまりいない。静岡の人は何もやっていないのではないか」といった、発破をかけるような激励の言葉があった。この理由は何か考えた時、やはり高い志を持った教育ではないかと思う。そういった意味でも志に注目している。静岡を出ていった後も、そういう方向に進んでくれる生徒を育てていく。静岡高校は県内でもトップクラスの高校であり、優秀な大学に行って優秀な人材をたくさん出しているが、その中でも、社会の中で貢献して志を持って活躍している人は、ちょっと少ないのではないか。社会に出た後の志、そういう点を少し考えていただきたい。

校　長　：　御意見のとおり、本校には県内各中学校から優秀な生徒が来ている。世界には優秀な人材がおり、そのような人材、機会に触れ、広い視点で高い志を持つといった教育を考えていきたい。そのためには海外との交流も必要だと思う。この点は、後ほどオンリーワン・ハイスクール事業でも説明したい。

副校長　：　進路課長が「君たちには行かなければならない大学がある」といったフレーズを使っていた。何かと思ったら、社会の中に目標を見つけた時は、大学に入れるかどうかを考えるのではなく、必ずその大学に行き最終目標に向かっていくという指導だった。東大に入れば良いというわけではなく、その生徒が抱えた課題や問題の解決を実現できるのならば、東大でも地元の大学でも、医学部でも理学部でも、場所も学部もどこでもいい。目標実現のために行かなければならない大学という哲学でもあり、進路指導も変わってくる。

会　長　：　教育の本質を問う良い話だと思う。具体的な教育方法や指導内容については、次の事業説明でもあるということなので、そちらでまた詳しくお願いしたい。学校経営計画について、他に質疑がなければ計画の承認を採決したい。（学校経営計画承認にかかる採決を実施。）

・ 令和３年度学校経営計画について承認された。

（４）学校概況及び新事業等の説明（副校長）

・ 概況説明
本校の特色として、日課設定により勉強、部活動、自己の時間を鼎立させている。授業、年間行事、部活動、進学などについて説明。

・ オンリーワン・ハイスクール（イノベーション・ハイスクール）事業説明
医療人材の育成を中心に、グローバル、ＳＴＥＭ等課題に対応した県の教育事業。各取組について、事業計画書、予算書により目標及び取組の詳細を説明。具体的には、医学部への進学率向上等を目標値に定め、大学や先進医療施設の視察、医療従事者による講演、進学講演会、外国人留学生ワークショップ、探究活動ガイダンス等の取組を、学校で企画・実施する。

＜質疑応答＞

会　長　：　先程の話ともリンクするが、事業では低学年から志をつくるように、医学分野など様々な取組で生徒に幅広い刺激を与え、是非そこに行きたいという気持ちを醸成したり、学力向上を目指したりするものだと思うが、現実として各学年の医学関係志望者はどの程度いるのか。

副校長　：　２年生は東大京大医学科進学希望者の有志で集まった活動をしている。

２学年主任：　２年生 320 名中 45 名程度が参加。学習グループを形成し、医学関係に進み、

社会に貢献したいという気持ちが育ってきている。全校生徒というわけにはいかないが、学校全体の様々な活動の場で、生徒がともに学び合い切磋琢磨していくような環境ができることを期待している。

３学年主任：　３年生の医学部志望も 40 名程度。

教務課長　：　１年生はまだ調査中だが、例年同程度。

会　長　　：　志望している生徒の半分が入れば目標とする医学部合格 20 名が達成するということか。

副校長　　：　国公立医学部合格の平均倍率は３倍程度であり本校でもかなり難しい。
その他の取組として、先程話に出た地域における学習として、キャリア形成プログラムという取組もある。地域には立派な方がたくさんおり、夏休みに生徒がインタビューに行くなど、その後ろ姿を見て地域社会を学ぶといった活動。市とＮＰＯ法人の協力で実施しているが、高い志を持つと同時に地に足を付けた活動も行う。

Ａ委員　　：　自身の活動で教頭先生も御一緒したが、職業高校のクラブ活動などによる地域貢献活動の審査をした。地域貢献では凄くレベルの高い活動を実施しているが、普通高校や進学校では中々できない。自分の目標に向かって邁進し勉強する中でこういった活動は難しいと思うが、これをやらないと社会に出た後、例えば我が社でも入ってすぐに辞めてしまう人が多い。銀行もそうだが、世の中のために何のために働いているのかといった目的意識を全く持たずに、点数だけで入り辞めてしまう。医学の世界ならば患者さんを助けるといったところだろうが、街の人を助けるという「目的の原体験」をさせてあげたい。

副校長　　：　良い方がいれば本校にも是非紹介していただきたい。

Ｃ委員　　：　私立医学部の場合、学費が年間１千万円と聞く。経済的な部分は大丈夫か。

副校長　　：　国公立の場合、他の理系学部と変わらない。初年度 70 万円、その後年間 50 万円程度。私学は１～２千万円の場合もある。

会　長　　：　先程のＡ委員の話だが、高校生の頃に地域の人と交流し、地域活動に参加し、地域の人々にありがとうと感謝される、そんな成功体験があると、その子は自分が地元で認められたという記憶が残る。進学で首都圏に、あるいは海外に出たとしても、将来的にはまた地元に戻り貢献したいという気持ちがあり、正のスパイラルが生まれる。静高生が全国で活躍することは大切だが、一部は地域に戻って地元のリーダーとして活躍しても良いと思う。医学も含め、社会には色々な面白いことがあると高校生のうちに経験させ、そこで認められたり、あるいは失敗したりすることも必要だと思う。そういった経験が人間としての幅を広げることにもなる。途中で就業をあきらめる人を減らすことにもつながるのではないかと感じた。

Ｄ委員　　：　方針も計画もたいへん素晴らしいものだと思うが、メディカル、グローバル、ＳＴＥＡＭ、探究活動、その他それぞれの活動を、何年生のどこの時期で、どう動機付けをして、実施していくのか。先程の東大京大医学科の放課後活動のように、それがわかるものもあったが、全体的な、体系的な、何学年の何学期にどう実施するといったことがわかるものを示して貰えると嬉しい。

副校長　　：　今回の事業説明資料は予算用の資料でもあり、今後さらに調整が必要なものである。新型コロナ対策などで調整が遅れており、来週の水曜日に担当者会議を行い、誰がどの時期に担当するか、どのような形で実施するか、年間日程に落とし込む予定である。担当者会議以降に資料を作成する。

Ｄ委員　　：　10 月の会議で、どのような位置付けとなった、こういう風に生徒たちが自ら志高く取組む、といったことを御説明いただければ良いと思う。

会　長　　：　大変貴重な意見をありがとうございます。10 月には事業も進み、全体計画的に具体性のあるものができていると思うので、簡単な報告、評価を加え、体系的な資料を御提示いただけるということでよろしいか。

副校長　　：　はい。

校　長　　：　先程のＡ委員や会長から、高校在学中に地域と触れ合う、原体験といった話があった。学校経営計画の中にもあるが、本校では「一部活動一社会貢献活動」といった取組目標もある。地域の方に御協力いただく点もあるが、今回、御指摘いただいた部分を含めて、各部活動でも進めていきたい。

会　長　　：　私事だが高校で校長をやった時に、静岡高校の一部活動一社会貢献活動を使わせていただいた。その学校では、元々野球部だけが地域貢献活動をしていたが、音楽系の部活動が施設で演奏会を行うなど、他の部活動でも実施するようになり、地域に愛される学校づくりを目指したところ、非常に良い効果があり、学校全体が評価されるようになった。そして、野球部は地域貢献が大きな観点として評価され、甲子園にも出場した。静岡高校の取組が県内で他の学校にも広がり、波及したということを報告しておきたい。

（５）意見交換等

会　長　　：　本日の授業の様子を見て、または学校の説明を聞いたうえで、委員の皆様全員の学校運営にかかる御意見を自由に語っていただきたい。

Ｃ委員　　：　授業を見て思ったのは、やはりＩＣＴが導入され授業が変わっているなということ。授業の録画などもしているのか。例えば、学校を欠席した生徒が授業に遅れてしまうといったことにも対応できるのではないか。

副校長　　：　一部の教員で導入しているが、全体では導入していない。

教務課長　：　自分の授業では実施している。長期欠席等の生徒に対しては、録画した授業や資料ＰＤＦを申請によりデータで提供している。

副校長　　：　土曜日の授業を、公式試合で休む生徒も全体的に多く、できる部分で個別に対応している。

Ｃ委員　　：　自分が学生の頃、テストの平均点が先生によって 10 点くらい差が出ることがあった。授業の録画があれば、他の先生がどのような授業をしているのか見ることができる。そのような点も良いかと思った。

Ｂ委員　　：　生徒は非常に熱心に授業を聞いていた。その点は良いと思うが、100%わかっている生徒ばかりではないと思う。そこをどう解決してあげるのか。先程のＣ委員　の言われた授業の録画もあると思うが、授業は全部録画していないのか。自分がわからないところを確認したい時、ＵＳＢ等に保管してもう一度見ることができるのもいいと思う。授業がわからない生徒に対して、どのように対応するのか、今日見ていてもわからなかった。学校の授業ではわからなくても、もう一度その授業を見ればわかるかもしれない。そういう対応を何か考えられるのではないかと思う。

校　長　　：　授業では 40 人程の生徒がおり、静岡高校といっても様々な生徒がいる。100%の生徒が授業を理解しているのかというと、難しいと思う。しかし、教員は生徒の表情を見て授業をやっているので、理解していないかなと感じた時には、教える手法を変えたり、質問をさせたりと、そういったことで理解をさせていく。授業を録画して生徒が見直すといった時間があるかというと、他の授業もあり、現実的には難しいことも考えられる。生徒に、より授業を理解してもらうというのは、我々教員の永遠の課題。何かしら考えていかなくてはいけないと思っている。

副会長　　：　授業を参観させていただき、先生がＩＣＴやタブレットを使い、効率的な授業をしていると感じた。自分が 40 数年前受けていた時は、クラスで数人居眠りしていたと思うが、今日は皆まじめに聞いていた。女性の先生も多く、静岡高校も変わったなと感じた。

学校経営計画の教育目標に「主体的に行動する生徒を育成する」「様々な分野で活躍するリーダーを育成する」とある。ＯＢとしてではなく、企業側の立場から言わせていただくと、何百人と採用してきた中で、欲しい人材は、主体的に動く、言われなくても自ら行動する人である。静岡高校の目標でもあるが、正に企業として求める人材であり、一人でも多くそういった人材を

育成して欲しい。さらにリーダーとして活躍してくれる人材になって貰えれば嬉しい。今、社会人で問題となっているのはメンタルヘルスである。会社でも見ていると、そういった部分で強い人間には友人の数が多い。喜びは共に分つと倍増する、悩みは人に相談すると半減すると言われるように、友人や親など相談できる相手がいると、心が強くメンタル的な病気も和らぐ。
また、井の中の蛙になって欲しくないので、極力視野を広げて欲しい。昨年、商工会議所も協力したキャリア形成プログラムでは、他校の生徒とプレゼンテーションや交流をしていて良かった。あるいは、グローバルな観点から言うと、英語弁論大会に参加している生徒もいる。そういった経験で広い視野を持った生徒を育成して欲しい。

Ｄ委員　：　落ち着いた学校だなといった第一印象だった。
ちょっと無理な話かもしれないが、静岡県の高校ではいつごろから生徒の一人一台端末が導入されるのか。静岡高校の取組を見ていると、ＩＣＴの活用がやはり不可欠だと思う。先生方がタブレット端末を持って授業をしていたが、先程の医学部放課後活動など日常的に生徒がタブレットを使用した方が良い。特に進学して医学部やトップを目指すような生徒には、とても必要な環境だと思う。
また、ＳＴＥＭ教育に力を入れていくということが伝わってきた。今の日本のＳＴＥＭ教育で言われている部分だが、ＳＴＥＡＭの「Ａ」、ＳＴＥＭにアートという考えを入れ、デザイン性をどう重視していくのか、新しい仕事は全てそこから生み出されるであろうと言われている。あと何年しても構わないので、ＳＴＥＡＭ、人工知能の中に人間の感性が入るということが合わせて考えられるような環境がつくられると良い。
昨年から、日本数学検定協会で、国際数学の日に合わせ「私の数学のイメージ」表現コンクールを実施している。中高生や高専生対象で、そこで審査員をしている。個人で応募してくる人が多いが、静高の１年生のうちに、学んでいる数学をどう表現して、どう人に伝えていくのかということができるのではないか。昨年、私の名前で表彰したのは、伊能忠敬と日本地図を数学に落とし込んで表現したものだった。今年は是非校内においてポスターなどで呼びかけ、静高の生徒なら何人でもチャレンジできると思う。学校外の所で、ほんのちょっと表現を深めていったら、誰かに何かが届けられる、そんな事をやっていただけたら嬉しい。
他にも高校生と英字新聞のコンクールもやっている。上智大学や東大の先生とやっているが、日本人は小学生の頃から作文をしていて、「私は」という観点になる。これから求められるものは小論文力と言われていて、特にレベルの高い学校へ行くと、二次試験の段階で求められる。エビデンスに基づいて、いかに自分の意見を人に伝えることができるのかというのが小論文力。だから、理数系を選択しても、国語力は重要となってくる。これは英語も一緒。英語においても「私」の観点ではなく、第三者的な立場で他者が読んで納得できる文章が書けるのかということであり、かなりレベルの高いものが求められてくる。本来はそこが出来て、様々な所で活用できると言われている。
そのため、上智大学や東大の先生と英字新聞甲子園を行っている。今のところ、私立トップ高やお茶の水とかそのような学校の参加が多いが、できれば将来的には県立学校にも参加して欲しい。部活の貢献活動など、活動によって自分がどんな影響を受けたのか、どういうことを他者にわかって貰えたのかということを、英字新聞で伝えることができたら面白いと思う。静高全体の魅力ある活動を、多くの方に知っていただくことができれば面白い。
大事なカリキュラムに踏み込むつもりはないので、無理にとは申し上げないが、数学表現コンクールは、個人で数学をどう捉え、自分は将来的に学んだことをどう活かしていくのか、どんな職業でどんなことに役立っていくのか

ということを考えることで、学びの原点だと思う。是非、静高全体のモチベーションが上がっていくような運営の応援、協議会ＣＳで微力ながら支えていければと思う。

校　長　　：　ＩＣＴタブレット導入については時期がわかるようなら教えて欲しい。
残念ながら本県では全生徒に用意することができないため、ＢＹＯＤ、個人として用意することになると思う。昨年のコロナ対応もあり、授業のＩＣＴ化は進んできたが、全職員全授業というわけではない。教員の活用能力を高めた上で、ＢＹＯＤを進めていきたいと考えている。検討事項であり、また、御意見をいただきたいと思う。数学コンクールについては、数学同好会があるので、是非、紹介させていただきたい。

Ｄ委員　　：　数学コンクールのポスターができたら送付する。

Ａ委員　　：　私からは静高生から感動を受けた話を二つ。
一つは先日教頭先生に御案内をいただき、文化祭を訪ね、郷土研究部に行った。郷土研究部と言えば、戦国時代の武将や地域の史跡などを調べるイメージが強かったのだが、見せていただいたのは、サクラエビの不漁をどう解決するかといったもの。黒潮の大蛇行や富士川の汚染、これは自分たちではどうしようもないが、サクラエビのブランド化や不漁の時にどういった商品を売っていくのかといった自分たちができることは何かという視点で研究していた。これはある意味一番今っぽい、今の時代を研究していて、郷土研究部がそういった活動をしているということに感動した。
もう一つは高校生の地域貢献活動の研究発表会があったときのこと。静岡高校も２チームくらい出てきたが、実業高校もいて、発表の内容は決して上位のものではなかった。その後、話した女子生徒が「みんな凄いです。私たちはまだまだです。」と言った。静高生が他の学校の生徒といて「みんな偉い」「自分はまだまだ」と認め、自分の得意なことではいいが、世の中には他に得意なことをしている人たちがいて、地域の役に立っている人がいる、そんな実感が、その子たちのとても良い表情に出ていた。そういう経験をして強い生徒さんになって、世の中の役に立って欲しいと思った。

会　長　　：　では最後に一つ。
先週、私立学校に訪問した時、進路課の先生の息子さんが静岡高校３年生だという話を聞いた。息子さんが言うには、１、２年の頃に比べ、３年の授業が非常にいい、予備校よりもわかる、言うなれば「神」授業だと話しているということだった。どの先生かはわからないが、そんな生徒に寄り添った生徒に理解される授業をしている。少なくとも、その生徒はそう思っている。それが一つの評価だと思う。私も３年間、学校評議員として授業を見学してきたが、毎年、授業のレベルが上がってきていると思う。今日見た授業も中身のあるいい授業だった。この会が、本当に、学校や生徒の役に立ち、そのような向上に無理なく良い方向に行けるような会であったらいいと思う。

４　閉会・諸連絡

（１）　議事録について

・後日、ホームページ等へ議事録を掲載する。

（２）　今後の予定

・第２回　令和３年 10 月 28 日（木）午後４時 45 分～７時 20 分（定時制公開日）
・第３回　令和４年２月上旬